

氏名（本籍）	かめがわ か の 亀川 果野（熊本県）		
学位の種類	博士（芸術）		
学位記番号	甲第 160 号		
学位授与年月日	2025 年 3 月 24 日		
学位授与の要件	広島市立大学大学院学則第 36 条第 2 項及び広島市立大学学位規程第 3 条第 2 項の規定による		
学位論文題目	日本の造形史に見る文字表現と「文字についての試行」（2021-）		
論文審査委員	主 査	准教授	荒木 享子
	委 員	教授	前田 力
	委 員	教授	今村 雅弘
	委 員	准教授	石谷 治寛

論文内容の要旨

本稿は、近年制作している「文字についての試行」という絵画作品の制作論である。本作は自身の持つ日本画を専攻してきたというルーツと、昨今のアートにおけるコンセプトやタイトルといった、言語という存在との相性についての葛藤がベースとなっている。

ある言葉が対象を指すとき、ある文字がその言葉に対応するためには、我々の狭くも広くもある不安定な了解が必要である。著者は、物に対しての言葉や、言葉に対しての文字がある程度の恣意性を持つ関係性ならば、その組み替えによる関係性の再構築も、絵画という地平においては実践可能なのではないかと考え、絵画に言語の断片となる文字をとり入れ、造形手段の一要素とした制作を行っている。その背景には、文字を絵と言葉の中間にあるものと捉え、文字には意味のあるものとしての側面＝意味性と、意味を排する時に見えてくる純粋な形態としての側面＝視覚性を持つ存在として見る絵画制作者としての造形的視点が存在する。そして、文字を使用する作品制作においては、この文字が持つ視覚性と意味性の振れが重要になってくる。

制作において意識している視覚性と意味性という観点に立った時、日本の造形史に見られる文字表現はその間を振れるものが多く見られる。本作は個人的動機をベースとしているが、その思考や表現の背景には無意識的に通底する文脈が存在するはずである。本稿では、制作を通して意識される各項目を、特に文字造形に見る「視覚性と意味性の振れ」という観点で挙げた。

流れとしては「文字についての試行」の前提となる、日本画の成立やその前後の表現傾向、日本の文字について、その形成過程や、かな書、葦手、異なる表記手段となる印刷技術の台頭に見る、文字の変質を見ていく。また翻って、東洋の代表的な造形分野である書との関係に言及するために、特に美術としての書の自立が強烈に意識される前衛書出現と非文字書の傾向、そのきっかけとして考えられる文化近代化政策渦の書画分離を見ていく。ここで中国より伝来した文人画≡書画という文脈の流れから見ていくことで、文字と絵の諸相を大きく捉え、また「書く」と「描く」という行為のうちにある差異の所在を改めて思考する契機とした。

結論では、本作の制作論を交え、これらのうちに見る文字表現を、文字の性質(意味性・視覚性)・表現傾向(表現的/形式的)という著者の観点により分析し、本作との共通項や相違点を明ら

かにし位置付けていくことで、作品理解の拡張と新たな展開を考察する足掛かりとした。その結果、従来の日本の思考に根付いていた平面的で等価的な捉え方による平面的造形嗜好が、現代のボーダーレスな有り様と感覚に合流し、日本画の装飾的傾向の再現の一つの要因となっていることが分かり、本作はその性質や表現の形式性に準ずるものと考察した。

文字の視覚性の表現的傾倒の末、意味性は乖離していき、視覚造形として逡巡することになった書の行方は、書画分離の一方で文学との決別により半ばやむを得なかった造形芸術としての展開が要因の一端にあったが、翻って日本画の装飾的傾向の再現が視覚性への傾倒と見れば同様の状況であると言えよう。本作が近年の日本画の性質や表現の形式性に準ずるものとするならば、視覚性だけではない多様なアプローチの模索の必要性が今後の展開の課題点として見えてくる。「文字についての試行」自体と書、特に前衛書との比較においては、主に文字に対する捉え方や造形方法という点から、本質的に目指すところを異にするものとしつつ、表現的には双方文字における意味性と視覚性の往復を行うものとして、ある種最も近いところに位置しているのではないかと見解した。さらに、現代における絵画に再び文字が表されることの意味とは、「言葉」という存在を「文字」と「絵」、「見る」と「読む」ことの知覚の差異によって、新鮮に捉え直す契機となる点にあることを、「文字についての試行」に関する現段階の結論とした。

論文審査の結果の要旨

申請者は、題名や作品説明、コンセプトとして作品に付随する「言葉」に端を発し、自身の制作テーマを「文字についての試行」とし研究を行ってきた。「絵」と「言葉」の間にある「文字」を感覚的また構造的に解体、再構築することで文字が認識される過程や、ありようを絵画作品に表現している。「文字」と「絵」の相関関係を視覚性／意味性の観点から考察、平安期の料紙にかかれたかな書、さらには南画以降の書画分離政策も含め、芸術と書とを時代背景とともに変化する過程を追い、特に前衛書における「抽象」と「文字であること」の葛藤は、申請者の制作論とも重なり内容の濃い論考となっている。また絵画における地／図の相対関係を文字が読める／読めないに置き換えるなど、絵画制作の中での実感と論理的アプローチの双方で探求がなされており、後半の制作論での自作品の分析も明解である。今回提出のあった最新作「文字についての試行（風景を分かる）」では、古事記に記される天地開闢(てんちかいびやく)の瞬間、天と地が別れる最初の時を言語の有無の状況となぞらえる。「言葉があてがわれてそれが何か『分かる』」。淡く透けるような白色画面は湿度を持って、文字の発露から文字が『分かる』認識の際まで水平線上にグラデーションを持ってゆっくりと立ち現われる。大学院から探求し続けたテーマの集大成に相応しい見応えのある作品となっている。論文と作品ともに独自性、完成度を有した内容として高く評価する。